

ポポポ第8回公演

「コッペリニャ」

脚本
さいけ

1

「会場」

シアターグリーン
BOX IN BOX

「日時」

2019年2月

登場人物

クロ	遊郭に住む男	黒猫
メイ	クロが作った人形	ラグドール
フラン	追廻、スーの幼馴染	雑種
スー	新造、フランに恋している	雑種
ビビ	遊郭の女主	ブリティッシュショートヘア
ヤリテ	遣手、遊郭の教育係	ソマリ
ふうた	追廻、フランの親友	キジトラの雑種
サングリア	部屋持ち、こてつが気になっている	マンクス
テキーラ	部屋持ち、性悪猫	ロシアンブルー
シャオチ	部屋持ち、ふうたが気になっている	ドラゴンリー
デレスタ	部屋持ち、病を罹っている	ペルシャ
エステ	新造	シャム
メーブル	新造、怖がり	キムリック
モカ	新造	アビシニアン
ナイル	新造	エジプシャンマウ
シーシャ	禿、デレスタの妹	ペルシャ
ターシャ	禿、デレスタの妹	ペルシャ
かげとら	金持ちの猫 DV男	アシエラ
こてつ	寡黙な男、	サバトラ
たま	テキーラに夢中の一般猫	雑種
きなこ	たまの嫁	雑種
しち	女衛(ぜげん) 猫達を連れてくる	ベンガル
シロ	クロの妻	白猫

「ジゼル」に引き続き、バレエ作品戯曲化第2弾！

「コッペリア」は遊郭の世界へ。

ロビーには切り絵のついた灯籠が床に置かれ、壁には赤い布が垂れ下がっている。舞台天井には提灯が見える。その提灯は舞台を越え客席まで続いている。舞台には紙の貼っていない赤く塗られた障子が置かれている。

劇場内では猫耳をつけたオス猫二人が客引きをしている。

猫の鳴き声が聞こえる。

開演30分前

フラン「いらっしやいませえ。」

ぶうた「いらっしやいませえ。こちらのお席はいかがですかあ。」

フラン「本日も色々とりどりの女子をご用意しております。」

ぶうた「是非是非御指名の程宜しくお願い致します。」

フラン「もう暫しお待ちくださいませ。」

ぶうた「お手洗いは階段を上がった所がございます。」

などと客引きをしている。

① オープニング 遊郭

鈴の音。

猫達が障子の後ろより各々に現れる。各々は自分の場所に着くと「なーん。」と鳴きながら客席を見つめている。その声は徐々に重なり徐々に大きくなっていく。そんな中ビビが現れる。ビビは手に持っていた鈴を鳴らす。

鈴の音

鳴き声は一斉に止む。

ビビ「皆様様、本日はご来場誠にありがとうございます。ここは、お客様が一時を嗜む為に生まれた場所でございます。お気に召したお子いたならば、ご指名して頂ければこれ幸い。買うとなれば、さあお祝い。愛妻として喜んで嫁いでいきましよう。気兼ねなく楽しんで下さいませ。もちろんお代もお忘れなく。ここは現世（うつしよ）と幽世（かくりよ）の狭間にある通過点、ようこそ描郭楼へ！最後までごゆるりと

お楽しみ下さいませ！」

明かりが消える。描郭楼の女主人ビビは居なくなる。

提灯が薄ぼんやりと点く、猫達は『ハナイチモンメ』を口ずさみ、新造達は舞う。

禿二人 「ようこそいらっしやいました！」

間奏

ヤリテ 「さあ、お前達、今日もたっぷりおべっか使ってお仕事すんだよ。」

遊女 「はあーい。」

ぷうた 「寄ってらっしやいみてらっしやい。」

フラン 「さあ寄ってらっしやいみてらっしやい。」

ぷうた 「いい子そろえてるよ。」

フラン 「イギリス猫、スペイン猫。」

ぷうた 「シヤム猫、タイ猫、もちろん雑種も。」

ヤリテ 「ここでは、選り取り見取りさ。お前達！」

男二人 「へえ！」

ぷうた 「・・・おい。」

フラン 「ん？」

ぷうた 「ポーっとすんな！売り文句！」

フラン 「あ、(咳払い)！あの猫この猫どれにしようかとお悩みの皆様様。」

ぷうた 「この一押しをご案内できればと存じます。」

フラン 「まずは入って間もない新造達。」

ヤリテ 「うぶなお子が好きなれば彼女らは如何でしょう？」

フラン 「大胆なエステ。」

ぷうた 「シヤイなメーブル。」

フラン 「しなやかなモカ。」

ぷうた 「笑顔のナイル。」

フラン 「そしてえー、えーそう！のっぼのスー。」

スー 「・・・。」

男二人 「奮ってご指名下さいませ！」

禿の二人は、トン、クン、ツク、テンを使い言葉遊び。リズムはコッペリア前奏曲の有名な曲から引用

ビビ 「こちらで物足りないという方、わかります。わかりますよ。そんな方々には更にも上の満足できるお子、部屋持ちもご用意してございます。」

ヤリテ 「一目ぼれマックス、サンタリア。」

サンタリア 「なーん。」

ヤリテ 「ロシアンブルーに虜、テキーラ。」

テキーラ 「なーん。」

ヤリテ 「魅惑のドラゴンリー、シャオチ。」

シャオチ 「なーん。」

ビビ 「そして、ここ一等一番のペルシャ猫、朱のデレスタ！」

部屋持ち達が前に降り花魁道中の様相を見せる。真ん中にはデレスタがおりシャオチ、テキーラ、サンタリアと続く。

狂乱の中、踊り手の中に紛れ、不意にフランは見た事のない女を見る。それはとても美しく吸い込まれそうな女だった。

② フランとメイ

鈴の音。曲が止む。フランとメイのみに明かりが入る。他の者は動かない。

フラン 「見た事の無い女を見た。何故気づいたかはわからない。沢山の人が行き交う中、客引きをする赤い格子の端でちょこんと佇んでいる。白と黒の艶やかな毛並み、表情は無く、丸く澄んだ瞳は、どこを見る訳でなく、まっすぐ一点を見つめている。その姿は欲にまみれたこの場所にあって明らかに不自然だと思っ
た。」

メイはフランの方向を向く。

フラン 「不意に彼女がこちらを向いた。私を見ると一度目を大きく開き、直ぐに目を背けた。彼女はゆっくりとこちらに向いた。」

メイ 「……。」

メイは微笑む。

フラン 「会いたい、と彼女は確かにそう言い寂しそうに微笑んだ。いや、厳密にはわからない。彼女と俺は何メートルも離れていたし、周りは騒がしかった。だから

ヤリテ 「ああ！ビビ様にかげとら様が急遽来られる事になってお伝えしないと！」

女郎達は急いでメイクを始める。

フランは女郎のメイクの手伝いをして回る。

ターシャ、シーシャ、飛び込んで来る。

シーシャ 「姉様姉様！ヤリテの姉様大変です！」

ターシャ 「大変です！」

ヤリテ 「何だい、シーシャ、ターシャ！私はこれからビビ様にお話があるんだよ！」

シーシャ 「かげとら様の送迎の手筈が整っていないと連絡が！」

ターシャ 「連絡が！」

ヤリテ 「何だって！」

ターシャ 「後、あとあとあとと！」

シーシャ 「ターシャ落ち着いて！」

ターシャ 「ん！みみ様が今日は来れないと連絡が！」

シーシャ 「連絡が！」

ヤリテ 「みみ様が？大部屋の料理は？」

二人 「ばっちり全部作りました！」

ヤリテ 「全部！？カーっ！もう何してんだい！」

二人 「お料理はどうしますか？」

ヤリテ 「全部捨てちまいな！」

ヤリテ、ぶつくさ言いながら出て行く。シーシャ、ターシャもはける。

エステ 「かげとら様だつて。フラン！筆を！」

フラン 「はい！筆ですね。」

モカ 「あの大金持ちの？フラン！鏡！」

フラン 「鏡、鏡。」

ナイル 「シャオチの上客だよ、羨ましい。フラン！」

フラン 「はい！」

ナイル 「メーブルに紅を渡してやって。」

フラン 「はいただ今。」

メーブル 「早く渡せとアピールする」

スー 「フラン、その白粉とつて。」

フラン 「ん？ああ。」

スー 「何？」

フラン 「さっきの話だけどさ。」
スー 「だから、人形。」
フラン 「人形？」
スー 「そ、あんたが見たやつ。」
フラン 「いや。だって。」
スー 「信じられない？」
フラン 「信じられない。」
スー 「残念ねえ人じゃなくて。口説くつもりだったの？」
フラン 「どうしてそうなるんだよ。するわけないだろ。」
スー 「・・・どうだか。」
フラン 「あれは人形じゃない。」
スー 「だから人形だって。」
フラン 「でも。」
スー 「でもじゃない、人形。」
フラン 「人だったら？」
スー 「人形だっつってんでしょ！顔作らせてよ！白粉は？」
フラン 「ん？ああ。」
エステ 「また痴話喧嘩？」
スー 「違う。そんなんじゃない。」
ナイル 「どうだか。」
エステ 「フラン！」
フラン 「はい！」
エステ 「あれは人形。」
モカ 「人形。」
ナイル 「あんたが知らないだけ。」
スー 「ほらね。だから言ってるでしょ。」
フラン 「見たんだ。」
スー 「何を？」
フラン 「微笑んだ所を。」

間

メーブル 「(音の出る怯える動作)！」

新造達は自分の作業をやめ、メーブル見て笑う。

フラン 「な、なんだよ。」
エステ 「あー可笑しい。まさかここに似たような事言うのがあるとはね。」
メーブル 「！」
モカ 「そっちはね、怖いんだって。」
フラン 「怖い？」
ナイル 「ねー？」
メーブル 「！」
フラン 「どういう事？」
メーブル (フランの足蹴にし、ナイルに訴える)
ナイル 「あんたは知らなくていいってさ。」
モカ 「ハイハイ、メーブル落ち着いて。」
メーブル 「！（モカに口を塞がれる）」
モカ 「この子はね。あの人形が。」
ナイル 「動いたって言って。」
エステ 「腰抜かして。」
モカ 「大騒ぎしたもんだから。」
ナイル 「飛んできたヤリテにこっ酷く怒られて。」
エステ 「漏らしちゃったのさ。」

女達は笑う。

メーブル (落ち込む)
モカ 「それ以来、お漏らしメーブルは、あの人形が怖いのだ。」
フラン 「どうしてヤリテが？」
エステ 「ああ、あれはねクロが作った人形だから。」
フラン 「クロ？」

クロという男が入って来る。クロは人形を抱きかかえ整備を始める。

エステ 「そう、ここには女亭主ビビの他にクロって男が住み着いてるらしいのさ。」
スー 「へ〜。」
ナイル 「噂だけどね。」
フラン 「噂？」
モカ 「そう噂、その男は朝から晩まで部屋に引きこもって人形を作り続けてるらしいの。」
エステ 「たった一つの人形を。」

モカ 「針と糸で。」
ナイル 「繫いで繫げて。」
エステ 「チク。」
モカ 「チク。」
ナイル 「キリキリ。」
3人 「カッシャンカッシャン。」
エステ 「チク。」
モカ 「チク。」
ナイル 「キリキリ。」
3人 「カッシャンカッシャン。」
3人 「チクキリ。チクキリ。カッシャンカッシャン。チクキリ。チクキリ。カッシャ
ンカッシャン。チクキリ。チクキリ。ピーンピン。」
エステ 「ばっつん！」
モカ 「愛おしそうに向かい合ってるって。」
ナイル 「そんな噂。」
メーブル 「(ナイルに耳打ち。)」
ナイル 「ん？で、その人形の所には近づいちゃ駄目ってヤリテが。」
メーブル 「(頷く)」
フラン 「どうして？」
ナイル 「ビビにあれば大事な人形だからって言われたんだってさ。」
モカ 「クロはビビの間夫って話もある。」
スー 「なにそれ。」
モカ 「ビビも女だよ。いいこと位するだろ。なーん。」
ナイル 「やめてよ。気色の悪い。」
モカ 「男に溺れたいのかもよ。」
ナイル 「男に？」
モカ 「そう男に。」
ナイル 「ありえないね、もしそうだとしたら、ここもお終いだ。」
モカ 「違うない。」
ナイル 「溺れさせるのはこちら側さ。」
フラン 「おい。」
エステ 「そうさ、私たちはその為にここにいるんだからね。」
フラン 「化粧は？」
モカ 「いいだろちょっと位。」
メーブル 「(フランを誘惑する。)」
フラン 「やめろって。」

スー 「これでわかった?!あれはただの人形。」

誘惑した女郎はフランから離れる。

エステ 「フラン、あたしの着物洗つといてくれる?」

モカ 「下着も頼むよ。」

ナイル 「変な事に使うんじゃないよ。それとお客に送る品準備しといて。」

メープル 「(・・・)」

ナイル 「メープルは新しい紅、仕入れて欲しいってさ。」

笑う4人。

フラン 「・・・。」

フラン、出て行くりする。

スーはフランを捕まえ。

スー 「どこ行くの?」

フラン 「会って確かめる。」

スー 「本気?」

フラン 「うん。」

スー 「仕事は?」

フラン 「化粧は終わっただろ?」

スー 「それだけじゃないでしょ?あんたの仕事は。やる事は山程あるんだよ。」

フラン 「少しぐらいサボったって。」

スー 「駄目だよ!ヤリテに目を付けられる!」

フラン 「大丈夫だよ。」

スー 「大丈夫じゃない!しちに報告されちゃう。」

フラン 「上手くやるから。」

スー 「そうやって今まで上手くできた事ある?昨日もボーツとして、ふうたに突っつかれてたじゃない。」

フラン 「ちよつと考え事してたんだよ!」

スー 「それに何私の呼び名、のっほのスーって?あれで本当にお客呼べると思ったの?」

フラン 「それは!」

スー 「ほんとセンスない。ふうたの方がまだまし。」

フラン 「お前な！」
スー 「何よ本当に事でしょ！」

いつの間に後ろにいる人形とクロはいなくなっている。
ヤリテが厳めしい形相で入ってくる。

ヤリテ 「何いつまでのんびりくちやべってんだい！もう仕事だよ仕事仕事仕事！そんな、心持じゃいつまでたってもお荷物さね。ここをクビになりたくなけりやさっさとお客を取る準備しな！フラン！あんたも何油売ってんだい！」
フラン 「すいません！」

ヤリテは急いで出て行こうするが、ふうた入って来て引き留め。

ふうた 「姉さーん。ヤリテの姉さーん。」
ヤリテ 「なんだい！かげとら様の事はお前に任せるって話しただろ？」
ふうた 「違うんです。ミミ様がやっぱり来られると。」
ヤリテ 「ミミ様が！？料理は？」
ふうた 「全部処分しちゃいました。」
ヤリテ 「処分！？誰の指示だい！そんなバカな事しでかしたのは！」
ふうた 「姉さんの指示です。」
ヤリテ 「カー！ちったあ待つもんだろ？そういうのは。本当に使えないね！すぐに作り直させるんだよ！」
ふうた 「ま、待って下さい！」
ヤリテ 「なんだい、まだ何かあるのかい！私はビビ様にかげとら様の事を伝えないといけないんだよ！」
ふうた 「今日急遽しち様もいらっしゃると。」
ヤリテ 「しち様が！？」
ふうた 「ええ。」
ヤリテ 「なんでそれを早く言わないんだい！」
ふうた 「たった今の連絡で。」
ヤリテ 「至急お部屋の準備をしないと。」
ふうた 「それと。」
ヤリテ 「まだ何かあるのかい！」
ふうた 「この様子も見て回りたいと。」
ヤリテ 「ああ、もうなんて日だい！」

ヤリテ出て行く。

エステ 「女衞のしち様が来るって。」

モカ 「こりゃ、気引き締めて仕事しないと。」

ナイル 「一度救われた身だからね。私達。」

エステ 「けど。」

モカ 「働けないってわかったら。」

ナイル 「一度目は救われる二度目は捨てられる。」

メーブル 「！」

エステ 「わかってるよ。行こう。仕事へ。」

4人の親造出て行く。

スー 「フラン。私はあんたと違ってちゃんと仕事してくるから。」

フラン 「ああどうぞ、きつとスーは才能おありでしょうからは非とも沢山お客をとって

下さいな！」

二人 「(にらみ合う。)」

ぷうた 「仲いいなお前ら。」

二人 「どこが?!」

ぷうた 「そういう所がだよ。」

スー 「ぷうた!その地藏みたいな薄ら笑顔が腹立たしいんだよ!」

ぷうた 「なんでだよ!幼い頃から見慣れた仲だろ?」

スー 「知らん。貴様とは今日初めて会った仲だ。」

ぷうた 「酷い!」

エステ 「スー!急ぎな!」

スー 「はい!」

スー出て行く。

フラン 「あー。」

ぷうた 「今日も機嫌悪いな。」

フラン 「悪い。スーの奴何なんだよ。」

ぷうた 「いんや、ヤリテ。」

フラン 「え?ああそっち?マシな方だろ。」

ぷうた 「そうか?」

フラン 「そうだよ。」

ぶうた 「最近、買われていった女郎がいなくて焦ってんだろ。」
フラン 「ビビにどやされてんのかな。」
ぶうた 「だとしたらいい気味だな。」
フラン 「違うない。」

シャオチときなこがやってくる。

シャオチ 「プウタ、ココニイタ。」
ぶうた 「シャオチ。どうした？ん？その人は？」
シャオチ 「キヤク、ムカデ、ウロウロシテタ。」
ぶうた 「ムカデ？」
シャオチ 「ムカデ。ウロウロ。」
ぶうた 「誰かが噛まれたら大事だ。」
シャオチ 「カマレル？チガウヨ。」
ぶうた 「え？」
フラン 「中で、じゃない？」
ぶうた 「ああ、中で、ウロウロな。」
シャオチ 「カンニブイナ。」
ぶうた 「偉そうに。」
シャオチ 「ワタシエライナ。」
ぶうた 「部屋持ちに上がったからって調子に乗るなよ。」
シャオチ 「オマエ、イツシヨウ、ヒラシャイン。」
ぶうた 「お前！この！この！」
シャオチ 「イア！イアア！」
きなこ 「あの。」
ぶうた 「ああ、すいません。なんででしょう？」
きなこ 「ここに、テキーラという女郎はいませんか？」
ぶうた 「ええ、いますよ。」
きなこ 「案内して貰えませんか？」
ぶうた 「買うんですか？まあ女でもいけるっちゃいけますが。」
きなこ 「・・・お願いします。」
ぶうた 「わかりました。ついてきてください。」
シャオチ 「チョト、マテ。」
ぶうた 「ん？」
シャオチ 「マツテ。ワタシモ、ヨウジアル。」
ぶうた 「どうした？」

シャオチ 「ナイノ」

ふうた 「ん？」

シャオチ 「ドウスルノ、キョウクルヨ。」

ふうた 「どういう事？」

シャオチ 「カゲトラカラモラタ。カンザシナイノ。」

ふうた 「カンザシ？」

シャオチ 「カゲトラツケルノ、タノシミイウテタ。」

ふうた 「何してんだよ！ああ！もうわかった。一緒に探そう！フラン。テキーラの所に案内してやってくれ。俺はシャオチのカンザシ探してくる。」

フラン 「え？」

ふうた 「頼んだぞ！」

ふうた、シャオチを連れて出て行く。

フラン 「お、おい！俺にもやる事が、って聞いてねえな。」

きなこ 「・・・。」

フラン 「(溜息) とりあえず案内しますね。」

きなこ 「すみません。」

フランはきなこを連れて出て行く。

明かり変化

④ 通りゃんせ

スー入って来る。

スー 「言い過ぎた・・・でもあの場合あするしか、でも何で人形？・・・あーもー！」

デレスタ入って来る。

デレスタ 「どうしたの？」

スー 「あ！すみません！」

デレスタ 「そんなに畏まらないで。」

スー 「でも。」

デレスタ 「いいのよ。」

スー 「はい。」
デレスタ 「何かあったの？」
スー 「あ、いえ、ホント大した事じゃないんで。」
デレスタ 「そう。」
スー 「ええ。」
デレスタ 「賢いのね。」
スー 「え？」
デレスタ 「慎重なのは良い事よ。ここで生き抜くならあんまり自分の事を気軽にしゃべらない方がいいもの。」
スー 「そうなんですか？」
デレスタ 「ええ。」

テキーラ入って来る。

テキーラ 「あら珍しい組み合わせ。」
デレスタ 「たまたますれ違っただけですよ。ね？」
スー 「あ、はい。」
テキーラ 「今日は休まれると聞いたのですが。」
デレスタ 「相変わらずお耳のお早い事。」
テキーラ 「デレスタ様がいらないなんて今日のお客様は寂しい思いをしますね。」
デレスタ 「他の素敵なお方もいますから大丈夫ですよ。」
テキーラ 「そうですか？」
デレスタ 「そうですよ。では私はこれで。」
テキーラ 「ゆっくり休んでくださいね。」
デレスタ 「ええ、ありがとうございます。代わりにお仕事宜しくお願い致します。」
スー 「私もお客様のお迎えを。」
デレスタ 「スー。」
スー 「はい。」
デレスタ 「もし、言い過ぎたって思う事があるなら素直に謝るのが一番ですよ。」
スー 「え？」
ヤリテの声 「スー！どこで油売ってんだい！スー！」
デレスタ 「急ぎなさい。」
スー 「はい。」

スーはヤリテの声のする方へ急いで向かう。
デレスタもはけて行く。

テキーラ 「・・・。」

テキーラが歌「通りゃんせ」を口ずさむ。
物憂げに今日来るであろうお客を待っている。

渡り廊下

客を捕まえた女郎が次々と入って来る。

会話は始まるがテキーラは気にせず歌い続けている。

エステ 「あらあ久しぶりです。」

ナイル 「ようこそいらっしやいました。」

モカ 「今から野暮の所だよ。え？」

メープル 「(うわあご愁傷様というリアクション)」

モカ 「同情するなら金をくれ。」

ビビ 「皆様どうぞごゆっくり。」

シーシャ 「ビビ様」

ターシャ 「様。」

ビビ 「何だい？こんなトコで遊んでるのかい。」

シーシャ 「遊んでません。」

ターシャ 「仕事です。」

ビビ 「デレスタのかい？」

デレスタ 「シーシャ、ターシャ。」

ターシャ 「お姉さま。」

シーシャ 「紙と筆がご用意出来ました。」

デレスタ 「じゃあ行きましょう。」

二人の妹 「はい。」

ビビ 「・・・。」

スー、こてつを連れ現れる

スー 「ビビ様、こてつ様がいらっしやいました。」

ビビ 「あら。こてつ様ようこそ。」

こてつ 「ええ。」

ビビ 「サンタリア。」

近くいたサンタリアがやってくる。

ビビ 「お相手してあげな。」

サンタリア 「はい。行きましょう。こてつ様」

こてつ 「ええ。」

ビビ 「ゆっくり楽しんでいって下さいまし。」

フラン、きなこを連れ入って来る。

フラン 「こっちです。」

きなこ 「すみません。」

かげとら、目隠しをして現れる。逃げる女郎。ふうたも入って来る。

シャオチ 「イヤー。」

かげとら 「見えぬく見えぬぞく。ガハハハ。どこだあ、私のシャオチはあ。こっちか！」

かげとらはビビに抱き着く。

かげとら 「つーかまえーた！シャオチもう離さないぞお。シャオチ！シャオチ！私の、ん？」

ビビ 「かげとら様。」

かげとら 「おお。ビビではないか！」

ビビ 「随分楽しまれているようで。」

かげとら 「んん？楽しくない！辛い！辛あい。今も目隠しをされておったのじゃ。」

ビビ 「それはお気の毒に。」

かげとら 「そうじゃ、辛くてたまらん！儂は生意気にもな、彼奴らに、いじるめら、いじるめ。いじら、いじれ。」

ビビ 「いじめられる？」

かげとら 「そうそれ。いじめらるとるのだ。うらあ、どこ行った！？シャオチ！そこに
おったか。逃げるでないぞ。次こそは。」

シャオチ 「イヤー、シャチヨサン。コチラコナイデ。」

かげとら 「駄目じゃ駄目じゃく。ガハハハ。」

かげとら、シャオチいなくなる。

ふうた 「やれやれ何とか間に合ったよ。」

フラン 「良かったな。」

ふうた 「ああ。」

かげとら声 「あらら？」

食器が割れる音。

ビビ 「随分飲まれているようで。ふうた。」

ふうた 「へえ！今日は大変な一日になりそう。」

ふうたはかげとらの方に出て行く。

フラン 「では行きましょう。」

鈴の音

フラン 「え？」

フラン以外の人間の時間が止まる。

メイが通り過ぎる。

フラン 「君！」

時間が動き始める。

きなこ 「ちょっと！どこ行くんですか？」

フラン 「あ、ああ。ちょっと大事な用を忘れてて。」

きなこ 「用？」

フラン 「行かないと。」

きなこ 「待って下さい。私はどうすればいいんですか？」

フラン 「道教えますから！向こうの角を左に曲がって突き当りの階段を上り、左右で曲がったら赤い提灯並んでる廊下の奥から3番目の部屋ですから！」

フラン出て行く。

きなこ 「ちょっと！そんなの覚えられる訳！もう！」

きなこも出て行く

ヤリテ、シチを連れてくる

ヤリテ 「ビビ様。しち様が。」

しち 「久しぶりだな。ビビ。」

ビビ 「そちらもお元気そうで。」

しち 「まあな。」

ビビ 「ご用件は？」

しち 「また何人か仕入れられそうだ。」

ビビ 「そうですか。取り合えずこちらへ。」

皆各々に出て行く

たまが現れる。

テキーラ、たまに気づく。

暗転

テキーラの歌声が止む

⑤ 再会

奥座敷 人形部屋

仮面をつけた人形が置かれた部屋。

M3 「からくり人形」

クロが立っている。その姿はあらゆる絶望を見た男の顔だ。

足元にはシロという女がいる。シロは動き出しそんなクロの眉間を優しくなぞる。

クロはシロに少し目を向ける。

微笑むシロ。

クロの表情は変わらない。

歯車が回る音、糸がギリギリ引っ張られる音がする。

シロの動きはギクシャクし始め遂にはモノになる。

すると周りの人形も動きだす。まるでクロを元気づけようとしているようだ。

クロはその姿を只眺めている。

鈴の音

人形達は動きが止まる。

メイが入って来る。

クロはメイを見る。表情が微かに震える。

今度は人形達がメイに絡み始める。

それは人形浄瑠璃のような光景で表情豊かな人形とは裏腹にメイの表情は冷たく固い。やがてゼンマイが切れたのか人形達は一つまた一つと動かなくなっていく。

クロはゼンマイを回す。人形を動かそうとする。しかし動かなくなる速度の方が早い。メイも動かなくなっていく。

クロ以外は誰も動かなくなる。

ゼンマイの音だけが聞こえる。

やがてゼンマイの音も聞こえなくなる。

フランが入って来る。

フラン 「ここは・・・クロの、部屋？あ。」

メイ 「・・・。」

フラン 「あの時、俺に話しかけてきてくれたろ。確か、会いたって。だから会いに来たんだ。」

メイは答えない。フランは近づく。

フラン 「君の噂を聞いたんだ。君が人形だって言われてさ。本当になのかどうか確かめたくて。君は、人形じゃ、ないよね。」

メイ 「・・・ええ。」

クロ 「！」

フラン 「やっぱり！だって生きてるようにしか見えなかったから。スーの奴ら嘘教えやがったんだな。後で馬鹿にするつもりだったって事か、あぶな・・・。」

メイ 「ねえ。」

フラン 「ん？何？」

メイ 「ねえ。」

フラン 「え？あ・・・。」

メイはフランに抱き着く。

フラン 「！！ええ！あ、いや、あの、その俺達まだそんな関係じゃないというか、って何言ってるんだ俺は。あ、あの、大丈夫？」

メイ 「聞こえた？」
フラン 「何を？」
メイ 「声。」
フラン 「声？」
メイ 「私の声。」
フラン 「聞こえた、会いたいわって。」
メイ 「ずっと、見た。」
フラン 「あの時俺も、見てたんだ。」
メイ 「うん。それ、感じた。」
フラン 「そっか。」

フランは戸惑いつつメイを抱きしめる。
歯車が回る音、糸がキリキリ引っ張られる音が鳴り人形達が動く。
クロが現れる。

フラン 「う、うわああああ！な、なんだこれ、人形が。」
クロ 「からくりだよ。」
フラン 「からくり？」
クロ 「そう。からくり人形。ぜんまい仕掛けの人形。慰める人形。」
フラン 「あの人は？」
メイ 「・・・ク、ロ。」
クロ 「その子の、父親だ。」
フラン 「この子の？」
クロ 「仲良くしてやってくれ。」
フラン 「ああ。あ、後さ、君の、名前は？」
メイ 「・・・。」
フラン 「ん？」
クロ 「メイ。命を育むと書いて、メイ。」

暗転

⑥ 言葉はいらない

明転

サンテリアと、こてつがいる。
後ろで、スー、エステ、ナイル、モカ、メーブルが様子を伺い顔を出す。

5人 「・・・。」
サンタリア 「冷えますね。」
こてつ 「ええ。」
サンタリア 「この後、暖かくなるそうです。」
こてつ 「ええ。」
サンタリア 「それからまた冷えるそうです。」
こてつ 「ええ。」
サンタリア 「その後暖かくなるそうです。」
こてつ 「ええ。」
サンタリア 「ええ。」
こてつ 「ええ。」

間

5人は間に耐えられず。ずっこける。

スー 「何？何の時間？」
メーブル 「(頷く)」
エステ 「結構長かったよ！」
メーブル 「(頷く)」
ナイル 「季節で。」
メーブル 「(頷く)」
モカ 「会話下手過ぎでしょ。」
メーブル 「(頷く)」
エステ 「お前はいい加減しやべれ。」
メーブル 「・・・(無視する)」
エステ 「おい！無視すんな。」
モカ 「こうなったら。」
ナイル 「こら、モカ！」

モカはサンタリアの気を引く。
サンタリアが気付く。

モカは会話で盛り上げる、色気を使えとジェスチャーする。
サンタリアは理解したのか、頷き親指を立てる。
残りの4人も頑張れと合図する。

感謝し頷くサンタリア。

モカ 「どんなもんだい。」

スー 「流石。」

モカ 「へへー。」

メーブル 「！」

サンタリア 「今は冬ですね。」

こてつ 「ええ。」

サンタリア 「その後、春ですね。」

こてつ 「ええ。」

サンタリア 「もう少し冬は続きそうです。」

こてつ 「ええ。」

サンタリア 「その後、春が来るそうです。」

こてつ 「ええ、今日は帰ります。」

サンタリア 「お見送ります。」

ずっこける5人。頭を抱える。

二人は去っていく。

ナイル 「何も変わってないし！」

スー 「全然伝わってないじゃない。色気は？話術は？」

モカ 「おっかしいなあ。」

エステ 「ありや、駄目だ。いくらサンタリア様が綺麗だからって。」

メーブル 「(お手上げジェスチャー)」

ナイル 「初めてのお客は良く指名するらしいよ。でもあれじゃ。ね。」

エステ 「今度の客も望み薄だね。」

ナイル 「違うない。」

モカ 「ごめんなさいね。サンタリア様。」

ナイル 「天に向かって言わないの。神様か。」

モカ 「…えへ。」

かげとらとシャオチが何やら叫びながら通り過ぎる。
それを見る5人。

5人 「うわあ。」

スー 「・・・あ。フラン！」

フラン入って来る。

フラン 「スー！話があるんだ。」

スー 「あの、私も話があるの！あのね私謝り……。」

フラン 「やっぱり間違いじゃなかった！」

スー 「え？」

フラン 「メイは生きてた！」

スー 「メイ？」

フラン 「メイだよ！」

スー 「待って待って、メイ？メイって誰？」

フラン 「人形だよ！スー達が人形だっていって俺を騙そうとしてた子。」

スー 「ちょっと待って騙そうって何？」

フラン 「からかうつもりだったんだろ？」

スー 「なにそれ！そんな事する訳ないでしょ！というか会いに行っただって事？仕事は？」

フラン 「いいんだよ仕事なんて。ああ、クロにメイと仲良くしてくれって言われたんだ。また来てくれて仕事なんてしなくていいからメイと一緒にいてやってくれて。」

スー 「フラン。」

フラン 「俺といる時のメイは凄く可愛いんだよ。」

スー 「フラン。」

フラン 「スー、今度紹介するよ、一緒に会いに行こう。スーもきつと友達になれるよ。」

スー 「絶対に嫌！」

フラン 「え？」

スー 「ねえ、仕事しないって。どういう事？」

フラン 「……。」

スー 「クビになりたいの？ここを。」

フラン 「あ。」

フランは周囲を見る。

周りは冷たい視線を送っている。

ヤリテ入って来る。

ヤリテ 「何してんだい！仕事もせずに！さあ、お客を捕まえるんだよ！行った行った！」

新造 「……はあい。」

エステ 「年増。」
モカ 「やめなつて。」
メープル 「シー。」
ヤリテ 「なんか言ったかい？」
エステ 「準備します。」
ヤリテ 「チっ。」

女達は出て行く

スーだけ遅れる。

ヤリテ 「スー！何ボーっとしてんだい！さっさと小汚い面なんとかするんだよ。」
スー 「・・・もうお化粧は終わってます。」
ヤリテ 「あら気が付かなかった。だったらさっさとお客を取ってきな。」
スー 「言われなくても、これから行くところです。」
フラン 「おい。」
ヤリテ 「・・・いい度胸じゃないか。」

ヤリテ、スーを引っぱたく。

フラン 「スー！」
ヤリテ 「フラン！あんたのせいだよ。あんたが甘やかすから、どいつもこいつも気位だけはいっちょ前の糞女になっちゃうのさ。」
フラン 「甘やかしてなんか。」
ヤリテ 「あ？あんたまでこの私に口答えするつもりかい？」
フラン 「え。」
ヤリテ 「口答えをするつもりかい？」
フラン 「いや、そんなつもりは・・・。」
ヤリテ 「口答えじゃないか！いいかい、どうにもあんたはまだここを理解してないよだね。ここはお客様を買ってもらえるようにする処なんだよ。買ってもらえなきゃ用無しだ。甘やかされて良い事なんて一つだってありやしないんだよ。この！この！」
スー 「うっ。」

フランは手を出せずにいる。

ぶうた入って来る。間に入る。

ぷうた 「姉さん！ここはちょっと落ち着いて下さい。」
ヤリテ 「ぷうた！あんたでも容赦しないよ。」
ぷうた 「いえいえ、姉さんが怒るのは無理ないです。本当馬鹿な奴らで。こいつらには俺もよく叱りつけときますから。それと、しちの旦那が。」
ヤリテ 「ふん！どうせ口先だけで終わるつもり・・・ん？」
ぷうた 「ですから、しちの旦那がお茶をと。」
ヤリテ 「んまあ！なんでそれを早く言わないんだい！」
ぷうた 「すいやせん。」

ヤリテは出ていこうするが、途中で振り返り

ヤリテ 「同じタイミングでここに連れてこられた好みかなんかしらないが、甘やかしてちゃいつか地獄を見る事になるよ！いいかい、ぷうた、お前がきっちり面倒みるんだ！そんな中じゃあんたが幾分マシだからね。言うこと聞かないならあんたがぶっ叩いてでも睨るんだよ。」

ぷうた 「それはもう。」

ヤリテ出ていく。

⑦ 3人の選択

ぷうた 「何やってんだよ！」
フラン 「すまん。」
ぷうた 「大丈夫か？」
スー 「大丈夫。」
フラン 「助かった。」
ぷうた 「いつものか？」
フラン 「ああ。」
ぷうた 「ったく、またかよ。」
フラン 「立てるか？」
スー 「・・・触らないで。」
ぷうた 「ほら。」
スー 「ありがとう。」
ぷうた 「なんで庇わなかった？」
ぷうた 「お前な。」
フラン 「・・・。」

ぶうた 「あのままにしてたらどうなったか想像できないお前じゃないだろ。前に別の

女郎が商売にならない位殴られたの忘れたのか。」

フラン 「すまん。」

ぶうた 「顔は大丈夫か?。」

フラン 「ぶうた、俺。」

ぶうた 「いいよ。」

フラン 「信じてくれ、ちゃんと俺助けよう。」

ぶうた 「いいって。スー。」

スー 「ん?」

ぶうた 「お客を取りに行くんだ。もたもたしてるとまたヤリテに怒られるから。」

スー 「うん。」

ぶうた 「フランには俺から言っとくから。」

スー 「じゃあ。これも言っておいて。」

ぶうた 「ん?」

スー 「もう人形と関わらないで。」

ぶうた 「・・・わかった。ほら、行ってこい。」

スー 出て行く。

ぶうたは煙草を出す。

ぶうた 「ほら。」

フラン 「・・・。」

二人は煙草を吸う。

ぶうた 「人形って?」

フラン 「人形じゃない・・・メイっていう、女だ。」

ぶうた 「女か・・・わかってるよな?ここに来れたのだから。」

フラン 「ああ。」

ぶうた 「なら、そんな事できるわけないよな。」

フラン 「・・・なあ。」

ぶうた 「ん?」

フラン 「変わったよな。スー。」

ぶうた 「・・・。」

フラン 「まっすぐにキラキラした目をしてたのに今じゃあ。」

ぶうた 「今じゃあ、なんだよ。」

フラン 「あ、いや。」

ふうた 「だから庇わなかったのか？毎晩毎晩好きでもない男に抱かれて、濁った眼にな
って捻くれちまったから庇いたくなかったって言いたいのか？」

フラン 「そういう訳じゃあ。」

ふうた 「じゃあどういう訳だよ。お前はスーの気持ちわかってんだろ？」

フラン 「・・・。」

ふうた 「だったらわかるだろ、あいつが今どんな気持ちか。なのにお前は他の女に夢中
って訳か。それじゃあんまりだ。あいつは生きてく為に俺らの為に犠牲になる
道を選んだんだぞ。変わったじゃねえんだよ。変わらせちまったんだよ。俺達
が。」

フラン 「わかってるさ。そんな事。」

ふうた 「いいやわかってないね。はつきり言うがスーがここを出られるのは買われた時
か死ぬ時だ。まして男の俺達は一生ここから出られねえ。逃げたが最後、足抜
けしたが最後あの世行き。俺達は毎日女達の世話をし続けて行くしか生きる道
はねえんだ。」

フラン 「じゃあ、あの時どうすれば良かったんだよ。」

ふうた 「そんなの誰にもわかんねえよ。」

シャオチ 入って来る。

シャオチ 「プウタ！」

ふうた 「お？どうしたシャオチ。また何か忘れちゃったのか？」

シャオチ 「シ、シツレイダナ。ワタシ、イツモ、ワスレテルチガウ。」

ふうた 「じゃあ、なんだ？」

シャオチ 「アノネ！ソノネ！」

シャオチ はもじもじしている。

ふうた 「何もじもじしてんだ。廁なら向こうだぞ。」

シャオチ 「ウン、ソウスル、テ、チガウヨ！キライヨ！シヌヨ！」

ふうた 「すまんすまん。」

シャオチ 「ハナシタイコト、アルヨ。」

ふうた 「ここじゃ駄目か？」

シャオチ 「・・・。」

ふうた 「わかったよ。じゃあ、俺は行くから。」

ふうたとシャオチは去る

フランは佇んでいる。

猫の音がする。

明かりが変わる。

ふうた、スー入って来る。二人は弱っている。

明かりが変わる。

しちの声 「これはまた随分と汚い猫だ。」

ビビの声 「そうだねえ、今にも死にそうだ。」

しちの声 「ああ。」

ビビの声 「雌の方は悪くないんだけどね。」

しちの声 「そうかい？」

ビビの声 「ええ。」

しちの声 「けどこんな状態じゃあねえ、可哀そうだが。」

ビビの声 「そうだね。」

フラン入って来る。

フラン 「にゃー！」

ビビの声 「なんだいこの子は？可愛いねえ。」

フラン 「にゃー！」

ビビの声 「ん？二人を助けろって言うのかい？」

フラン 「にゃー！」

ビビの声 「そうかい、大切なんだね、この子らが。」

しちの声 「ビビ。どうする？」

ビビの声 「そうだねえそっちの雌猫が3匹分働くなら考えてやらない事もないよ。」

フラン 「・・・にゃー。」

スーは渾身の力で起き上がり。

スー 「にゃーにゃー、にゃー。」

明かりが変わる。

3人は居なくなる。

⑧ 職業病

しちとビビが座っている。

ヤリテがシーシャ、ターシャを連れて入って来る。

ヤリテ 「お待たせしました、あの、これを。」

ヤリテはお茶を差し出す。

シーシャ 「このお菓子もどうぞ。」

ターシャ 「どうぞ。」

しち 「これはこれは申し訳ない。よく働くねえ。」

シーシャ 「いえ、まだまだです。」

ターシャ 「まだまだです。」

しち 「おや？どうして。」

シーシャ 「まだお客がとれないから。」

ターシャ 「早く大人になりたいです。」

しち 「辛い仕事だよ？大丈夫かい？」

シーシャ 「え？」

しち 「苦しくて痛いかもしれないよ？それでもできるかい？」

シーシャ 「え、えと。」

ターシャ 「できるよ！お姉ちゃんがしてるんだもん。私達だってできる。」

シーシャ 「うん。できる。」

ビビ 「しち。」

しち 「ははは、これは失礼、大人げなかったね。」

ヤリテ 「あんた達。向こうおいき。お姉ちゃんのお世話があるだろう？」

シーシャ 「はい。では失礼します。」

ターシャ 「失礼します。」

シーシャ、ターシャ出て行く。

しち 「ここも随分大きくなりましたな。」

ビビ 「ええお陰様で。」

しち 「最初は一か月持たないなんて言われてましたが、なかなかどうして。」

ビビ 「皆、必死ですから。」

しち 「結構結構。あー、んん？」

「なんでしよう？」
「あの姉妹の長女、確か……。」
「デレスタ。」
「そうそうデレスタ。随分と綺麗な女郎だ。」
「ここが一番の女郎ですから。」
「それは凄い。となれば身請けの話もあつたんじゃないですか？」
「ええ。幾つも。ですが。」
「ですが？」
「妹達を残してはいけないと首を縦に振らないのです。」
「ははは、それは大変だ。」
「シーシャ、ターシャが大きくなるまで自分で仕事を取って二人が身請けするま
でここに、と。」
「感動的な話じゃないですか。」
「ええ。」
「そうなると良いですね。」

しちはお茶を飲む。

「クロは？」
「……彼は奥の座敷に。」
「やれやれ彼には困ったものだ。ここは彼が作った場所だろうに。ねえ？」
「……。」
「まだ、メイを？」
「ええ。」
「いい加減彼女も処分しないと。」
「待って下さい。彼女は。」
「ヤリテ！余計な事言うんじゃないよ。」
「すいません。」
「しち、その件は保留にして頂くって決めたかどうか？」
「はて？」
「……。」
「ははは、そんな怖い顔をせずともわかっている。メイには手は出さないさ。」
「ありがとうございます。」
「だが他の者なら話は別だ。病は蔓延する、伝染病ならなおさらだ。これ以上あ
れを見過ごす事はできない。明日連れて行く。」
「どうしてもですか？」

しち 「隠し通すつもりだったかも知れないが残念だったな。ここで長く働く事は難しい、いずれその時がやってくる。」

ビビ 「そうだね。」

しち 「だが安心しろ、イイのが何匹かここに来る。もしかしたら何匹かはここを出られるだろうさ。勿論生きて、な。」

ビビ 「・・・。」

しち 「では失礼するよ。輸送の準備があるのでね。あ、そうそう。クロに言っておいてくれ。守るべきものは何だったのか？つてね。」

ビビ、しち、ヤリテは、はけていく。

⑨ 送る手紙

スー入ってくる。4人の親造もいる。

エステ 「あんな男どこがいいの？」

モカ 「人形が生きてるとか言って仕事サボってさ。」

ナイル 「ぶうたの方がよっぽどいい男だよ。」

メーブル 「(頷く)」

スー 「・・・。」

モカ 「悪い事言わないからさ。あの男は止めときな。」

エステ 「碌な男じゃないよ。」

ナイル 「さっさと次に行きなよ。いずれあなたにも他に良い間夫ができるからさ。」

スー 「・・・。」

モカ 「何？そんなに好きなの。」

スー 「好きじゃない。」

ナイル 「諦めが悪いね。」

スー 「だからそういうんじゃないって。」

エステ 「どうせ今のままじゃ、ここをクビになるよあの男。」

スー 「なんでそんな事言うの？」

エステ 「え？」

モカ 「なんでって。」

ナイル 「ねえ。」

スー 「フランは私を助けてくれたの。」

エステ 「それいつの話？」

モカ 「だとしてもねえ。」

スー 「昔に戻りたい。」

デレスタ 「そうね。」

スー 「……。」

デレスタ 「私はね、大切な人が少しでも幸せになれるよう、できる事をしようって決めているの。」

スー 「幸せに？」

デレスタ 「相手を思えば見えてくる答えもあるの。」

スー 「妹の二人？」

デレスタ 「私の事はいいの。」

スー 「……。」

デレスタ 「スー、周りがなんと言おうと結局どうするかを決めるのはあなた自身だから。どんな選択をするにせよ、あまり自分に嘘をつかないようにね。」

スー 「はい。」

デレスタ 「あと、これ。」

スー 「これは？」

デレスタ 「軟膏、打ち身に効くわ。意地の張り過ぎも程々にね。」

スー 「ありがとうございます。」

スー 出て行く。

デレスタ 「シーシャへ、ターシャへ。」

二人は覚えていないだろうけど最初出会った時、二人は私の事を取り合っていたんですよ、目も開いていない赤ん坊の頃の話です。その時のお母さんはなんだか複雑そうな顔をしていて。私は少し誇らしかったのを覚えています。今思い出すのは母さんが亡くなった時。シーシャは一日中泣いて、ターシャは目に涙を沢山溜めて、けれど決して泣かなかった。私も辛くなって気づいてたんだよね？夜三人でまだ寒さ厳しい真冬の公園近くのベンチ下で寄り添って寝てる時、ターシャは母さん、お母さんって呟いて私の手をギュって握って泣いてた。私ね、その時にこの二人は何がなんでも守らなきゃって思ったの。お母さんの代わりにならなきゃって。それで私はお母さん代わりになるつもりで接してたけれど。難しいね。親の代わりって。私はいつまでたってもお姉ちゃんに母親にはなれなかったな。シーシャはしっかり者になって私に迷惑かけないように頑張ってる。それは頼もしくもあり、心配でもある。走り過ぎないようにね。ターシャはそれに必死についてきてる。焦んなくてもいいからね、自分のペースでいいから。すごいでしょ？私ちゃんとみてるのよ。ありがとうございます。食べる物が無くてどうにもならなくなった時、縁あつ

てここに流れ着いたけどその事に私は後悔していません。寧ろここで働く事に誇りを感じています。これからも働いていきたい。あなた達の成長は陰ながら見守っていきたい。きっと立派な女性になっていくのだと思います。私に言えない隠し事が増えたり、反発されたり。そんな事をこれから3人で経験していきたいなって。そんな事ばかり考えています。

今までの月日はあつという間で、私にとっては。かけがえない幸せな時間でどれもキラキラと輝いてる。ずっとこれからも一緒にいたい。シーシャ、ターシャ、もし、もしね。私がいなくなっても、私はずっとあなた達をみるから。だから前を向いて、一生懸命に生きるのよ。愛してるわ。心より愛を込めて。デレスタ。」

デレスタは咳き込む。

咳き込みながら手紙を封筒に包む。

シーシャ、ターシャ入って来る。

シーシャ 「お姉ちゃん！」

ターシャ 「大丈夫？お姉ちゃん。」

デレスタ 「大丈夫よ。大した事ないわ。」

シーシャ 「お薬！」

ターシャ 「うん！」

デレスタ 「待って。」

ターシャ 「何？」

デレスタ 「あのね、数日経てば、しちさんが病院に連れて行ってくれるの。」

ターシャ 「本当？」

デレスタ 「ええ。」

ターシャ 「良かったあ。」

シーシャ 「ほら言ったじゃない。心配ないよって。」

ターシャ 「嘘、シーシャも心配したでしょ？」

シーシャ 「なんで言うの！」

デレスタ 「ふふふ、二人共、こっちいらっしやい。」

シーシャ 「何？」

デレスタ 「いいから。」

デレスタは強く二人抱きしめる。

デレスタ 「あのね。私が病院に行ったら。この封筒を開けて欲しいの。」

シーシャ 「封筒？」

ターシャ 「手紙？」

デレスト 「それは開けてからのお楽しみよ。」

シーシャ 「楽しみ！ね！」

ターシャ 「うん！」

デレスト 「さ、お薬飲みに行きましょう。」

二人 「うん。」

3人は出て行く。

⑩ テキーラ

テキーラ 「通りゃんせ」の歌を口ずさむ

明かりは変わる。

部屋。

たま入って来る。

たま 「テキーラ。」

テキーラ 「(歌を辞め) あら。」

たま 「いい歌だ。」

テキーラ 「下手の横好きですけど。」

たま 「んな事ねえ。なんつーかな胸の奥？ギュって心に染みるよ。」

テキーラ 「本当？」

たま 「ああ、綺麗で純粋なおめえさんだからできるんだ。その気になりゃ歌だけで食ってけるよ。」

テキーラ 「ありがとう。」

たま 「ん。」

テキーラ 「ふふ。」

たま 「な、なんだよ。」

テキーラ 「まさか、あのタマ様にそんな事言われるなんて。」

タマ 「ばっ！どんだけ、お前の事見てきたと思ってんだ。言われてうれしい事位考えるさ。」

テキーラ 「最初はあるなに仏頂面だったのに。」

たま 「それはだな。」

テキーラ 「どれ位？」

たま 「ん？」

テキーラ 「どれ位考えてたの？」

たま 「どれ位って。毎日だ。一日だって、いや、一時だってお前の事が頭から離れた事ねえんだ。」

テキーラ 「そう。」

たま 「そうだ。お前がいれば他はなんにもいらぬ。」

テキーラ 「こっち、いらっしやい。」

タマとはテキーラは抱き合う。

たま 「あゝ。幸せだ。」

テキーラ 「ふふ。」

たま 「この世で俺が一番の幸せもんだ。」

テキーラ 「ずーっとここに居てくださいな。」

たま 「テキーラ。」

テキーラ 「なあに？」

たま 「大事な話があんだ。」

テキーラ 「話？」

テキーラはタマの方を見る。

たま 「身請けして欲しいんだ。」

テキーラ 「え？」

たま 「俺の嫁になってくれないか？」

テキーラ 「お嫁に？」

たま 「そうだ。」

テキーラ 「ここから出してくれるの？」

たま 「俺とは嫌か？」

テキーラ 「そんなことないわ。嬉しいわ。」

きなこ入って来る。

きなこ 「……。」

たま 「……お前が他の男とその、イイ事してるなんて耐えられねえ。お前だって望んでこんな仕事ついてないって事も俺はわかってる。だから俺は。」

テキーラ 「身請け金の方は大丈夫なんですか？」

たま 「ん？ああ、宛てはあるから。それまで待っててくれるか？」

きなこ 「どこにそんな宛てあるんですか。」

たま 「え？」

きなこ 「どこにそんなお金あるんですか！」

たま 「き、きなこ。」

きなこ 「仕事もろくにせず、子供はほったらかし、貯金も生活費も全部使い切り、挙句借金にまで手を出して。」

たま 「ま、待て、話を聞いてくれ。」

きなこ 「今更何の話を聞けって言うんですか！！こんな、こんな女の為に！」

テキーラ 「え？」

きなこ、テキーラの顔を叩き、掴みかかる、

きなこ 「お前が！お前が騙したから！」

テキーラ 「ひ、ひいい。」

きなこ 「この売女！尻軽！あばずれ！」

たま 「落ち着け、きなこ。テキーラはそんなんじゃない。」

きなこ 「なんで庇うんですか！」

たま 「庇うとかそういうんじゃない。まずは落ち着けて。」

きなこ 「五月蠅い！何を落ち着けと？」

タマ 「兎に角話を聞いてくれ！」

きなこ 「私に触らないで！」

たま 「アイタ！」

フラン入って来る。二人の間に止めに入る。

騒動を聞きつけた、モカ、エステ、デレスタ、メーブルが入って来る。

フラン 「ちょっと何してるんですか！」

きなこ 「離して！離して！」

テキーラ 「誰かー誰か！」

テキーラ助けを求めてはけようとする。

シャオチが出てくる。

フランはきなこを羽交い締めにして奮闘している。

シャオチ 「タスケテ！」

テキーラ 「へ？」

かげとら入って来きてシャオチを抱きしめようとするがシャオチはするりと躲し手テキーラを抱きしめてしまう。

かげとら「みいつけた！」

テキーラ「きゃー、シャーー！」

かげとら「いだあい。」

テキーラはかげとらを突き飛ばす。かげとらはうめき声あげ四人の親造の方へ四人の親造は悲鳴を上げシャーっと威嚇、猫パンチ等をし、かげとらを突き返す、するとかげとらは羽交い締めしているフランの方へ逃げて行き、きなこに抱き着いてしまう。

きなこ「・・・きゃー！」

かげとら「い！だあ！ぐほ！」

きなこは、かげとらを引っぱたく。

かげとらは後ずさり、体をくねらせ。

かげとら「・・・痛くなあい！全然痛くなあい！シャオチ！そこか！」
シャオチ「イヤー。」

かげとらとシャオチは出て行く。

たま「きなこ。俺が悪かった！」

きなこ「・・・。」

たま「全部俺が悪いんだ！金も全部勝手に使ってしまった。ちゃんと返すから。許してくれ、この通りだ！」

きなこ「・・・。」

たま「な？」

きなこ「許さない。」

たま「きなこ。」

きなこ「許せないし、許さない。」

たま「すまん。」

きなこ「(溜息) あんた。」

テキーラ「ひい。」

きなこ「あなたも！」

きなこはテキーラと並んで座り。たまを見つめる。

きなこ 「選んで。」

たま 「え？」

きなこ 「私はあなたを許せないし、許さない。でもそれはお金を使い込んだからじゃないの。勿論それも嫌だけど。私が今許せないのはそれじゃないのよ。あなたが私と私とあなたの子がいながら他の女の女に夢中になってる事が許せないの。言ってくれたじゃない。ずっと私を大事にするって。私しか要らないって。氷川天神の桜が咲き始めた木の下で、あなた言ってくれたじゃない。それは嘘だったの？」

たま 「……。」

きなこ 「凄く嬉しかったのよ。あなたにそう言ってもらえて……。もし許して欲しいって思うならまず誰と今後一緒にいるかを選んで下さい。私か、この人か。」

間

たま 「……俺は、やっぱり、その……。お前と一緒にいたい。」

たまは手でテキーラの方向を指す。それを見たテキーラはほんの少し、うっすらとした笑みをきなこに向ける。ざわつく野次馬。

きなこ 「そう。」

たま 「すまん、使った金は必ず返す。子供の養育費も。」

きなこは立ち上がり。

きなこ 「さようなら。」

きなこ出て行く。

たま 「すまん、迷惑かけた。」

テキーラ 「いえ。」

たま 「別れるつもりだったんだ。全部精算してからにしようって。」

テキーラ 「何か飲まれますか？」

たま 「いや、今日は帰る。っていつでも帰る家はもうないけど。必ず戻って来るから。」

テキーラ「タマ様。」

たまはテキーラを抱きしめる。たま出て行く。
ヤリテ入って来る。

ヤリテ「今日はいつになく忙しい日だね。これは何の騒ぎだい？」

テキーラ「・・・あくもうめんどくせえなあ。」

ヤリテ「テキーラ！」

テキーラ「今日来た男、さしにしてくんな。」

ヤリテ「さし？」

テキーラ「出禁。」

ヤリテ「ったく、またかい？あんた今月で何人目だよ。骨の髄までしゃぶっちゃまって。程よく転がさないと。」

テキーラ「向こうが勝手に出すんだよ、ま、金もうねえんだし。うだうだ言われてもね。金持ってるならいいけどさ。金の切れ目が縁の切れ目、女の切れ目。あーあ、なんでこんな金のねえクズばかり寄ってくんだろうな。どっかに上客はいないもんかね。」

ヤリテ「フラン！あの男はもう入れちゃ駄目だよ。他の男連中にも知らせるんだ。」

フラン「あの男はどうなるんですかね？」

ヤリテ「はあ？」

テキーラ「知ったこっちゃないさ、女房も金も子供全部失っちゃまって。いい気味。」

ヤリテ「可哀そうにねえ、あの男、女を見る目が節穴だったばっかりに。」

テキーラ「うるせえ。どうせ、むこうもこっちをモノとしか見てねえんだ。仕返ししたって罰はあたんねえじゃねえか。」

ヤリテ「どこ行くんだい！」

テキーラ「今日はもう十分稼いだだろ？今日はもう寝るよ。」

ヤリテ「テキーラ。」

テキーラ「言っとくが私は買われねえからな。身請け金位、自分で払って自分で出てくんだ。」

ヤリテ「待ちな！」

明かり変化

他の人々も出て行く。
フランだけ残り。

⑪ 籠

Mが入る

フラン 「可哀そう、ヤリテはそう言った。確かにそうなんだと思う。性に溺れて普通なら当たり前前取るべき答えを見失った男。多くのしがらみに生きている中で、そんな当たり前じゃない答えを選んでしまった彼を俺は羨ましいと思った。思ってしまった。もし俺だったら何もかも捨ててテキーラを取る事ができたろうかと。俺やぶうたの為に働いているスーを置いてメイを選べるのだろうか。そんな事を考える事自体どうかしてる。ここでは皆もう普通でいられないのだ。ここは女が春を売りどこまで落ちて行く場所。檻なんだ。」

テキーラ、サングリア、デレスタ、シャオチが舞台上出てかごめを口ずさむ。

スーが仮面の男に抱かれている。

フランはそれを見る事しかできない。

メイがフランの前にやってきて優しく誘う。

フランはメイにすがる。

女達が現れる。

仮面の男達も現れる。

曲が盛り上がる

影絵

舞台袖障子が中央に閉まり影絵となる。

後ろにはかげとらとシャオチの二人

かげとらはシャオチを抱きしめ、そして、殴り始める。

苦しむシャオチ、周りから無数の手が伸びる。

その姿を途中から目撃するぶうた。

ぶうた 「……!……!」

ぶうたはシャオチの名を呼ぶがその声は聞こえない。立ち尽くす、ぶうた。

暗転

音が消える。

⑫ シロとクロ

鈴の音

クロが立っている。

シロが入って来る。

シロ 「あなた。」

クロ 「シロ。」

シロ 「今日もお疲れ様。」

クロ 「ん。」

シロ 「良く頑張りました。」

クロ 「うん。」

シロ 「・・・クロ。」

クロ 「ん？」

シロ 「眉間。」

クロ 「眉間？」

シロ 「ずっと寄ってる。」

クロ 「ああ、ごめん。」

シロ 「謝んなくていいのよ。」

シロはクロの眉間を触る。

クロ 「本当だ。寄ってる。」

シロ 「でしよう？」

クロ 「今気づいた。」

シロ 「鈍感さんね」

クロ 「鈍感さんだ。」

シロ 「今日はお空が綺麗ねえ、真っ青。昨日までの雨が嘘みたい。ね？」

クロ 「少し怖いんだ。」

シロ 「怖い？」

クロ 「うん、だから緊張してる。自分で選んだ事なのにね。」

シロ 「失敗してもいいのよ。誰だって最初から上手くできる人なんていないわ。」

クロ 「届くかな？」

シロ 「届くわ。」

クロ 「そうだな。」

シロ 「諦めない事よ。」

クロ 「この場所を救いの場所にしたんだ。一人でも助かるように。」

しろ 「しちは？」
クロ 「わかり始めてる。」
しろ 「誇っていいわよ。あの人、心が無かったもの。あなたの熱意が彼を動かしたのよ。」
クロ 「俺達はたまたま運が良くてここにいる。でもそれだけじゃいけないんだ。」
クロ 「そうだね。」
クロ 「うん。」
シロ 「ねー。あなたのパパは凄く強い人なのよ。あなたもその強さが受け継がれるといいわね。」

お腹をさするシロ。

クロ 「決めたよ、名前。」
シロ 「え？」
クロ 「命を育むと書いてメイ。」
シロ 「よろしくね、メイ。」

シロは微笑む。
ビビ入って来る。

ビビ 「シロ。あんまり出歩くと体に障るよ。」
シロ 「母さん、名前が決まったわ。」

鈴の音

シロは崩れ落ちる。ビビは横に座る。

シロ 「母さん。」
ビビ 「ここにいるわ。」
シロ 「お母さん。」
ビビ 「ここにいるわよ。」
シロ 「私の赤ちゃんは？」
ビビ 「元気よ。」
シロ 「そっか、良かった。」
ビビ 「ええ。」
シロ 「ねえ。」

ビビ 「何だい？」

シロ 「毛づくろいしてあげなきゃ。」

ビビ 「そうだね。」

シロ 「でも難しいかな。なんだか体が動かない。」

ビビ 「ほら、この子よ。可愛い女の子。」

シロ 「メイ。メイ、ごめんね、抱きしめてあげられなくて。一緒にいてあげられなくて。」

鈴の音

シロは動かなくなる。

クロ 「ビビ！シロは！？」

ビビ 「この子はね、産まれた時から甘えん坊でね、ずっと私から離れようとしなかった。私の指を小さな手でギュって掴んで中々離そうとしないの。大人になっても甘えん坊は相変わらずで。よくケンカもしたけれど私の事を誰よりも大事にしてくれてた。最後までよく頑張ったね、ありがとうね。」

クロ 「シロ！」

ビビ 「どうして先に逝ってしまうのよ。どうして。」

クロ 「ビビ。」

ビビ 「言伝を頼まれたわ。」

クロ 「言伝？」

ビビ 「ええ。」

鈴の音

シロ 「クロ、愛してるわ。メイをお願いね。」

クロ 「駄目だ、行かないでくれ、シロ、シロ！」

シロとビビは出て行く。

鈴の音

入れ替わるようにメイが入って来る。

メイ 「父さん。母さんはどんな人？」

クロ 「優しい人だった。」

メイ 「母さんはどうして死んじゃったの？」
クロ 「体が弱かったから。」

鈴の音

メイ 「私も働きたい。」
クロ 「メイ。」
メイ 「母さんみたいに父さんを助けたい。」
クロ 「駄目だ。」

鈴の音

メイ 「父さん。私好きな人ができたの。」
クロ 「駄目だ。」

鈴の音

メイ 「父さん、身請けしてくれるって。」
クロ 「駄目だ。」

鈴の音

メイ 「父さん、あの人はいつになったら来るのかな？」
クロ 「駄目だ！」

鈴の音

メイ 「父さん、あの人には別の人がいたみたい。」
クロ 「駄目だ！！」

鈴の音

メイ 「私、私。」
クロ 「メイ！」

鈴の音

メイは座り込む。
フラン入って来る。

フラン 「メイ！」
メイ 「あ。」

メイはフランにしがみつく。

フラン 「どうした？体調でも悪いのか？」
メイ 「怖い夢を見た。」
フラン 「夢？」
メイ 「あなたがどこかに行ってしまう夢。」
フラン 「俺はどこにも行かない。メイの傍にいるよ。」
メイ 「ねえ？」
フラン 「ん？」
メイ 「私の事好き？」
フラン 「え？」
メイ 「好き？」
フラン 「・・・好きだよ。」
メイ 「私も好き。やしろ様。」
フラン 「ん？やしろ？やしろって？」
メイ 「あなたの事よ。」
フラン 「え？」
メイ 「どうしたの？」
フラン 「違う。」
メイ 「違う？」
フラン 「俺は、やしろじゃない。」
メイ 「やしろじゃない？」
フラン 「俺はフランって言うんだ。」
メイ 「フラン？あなたが？」
フラン 「ああ。」
メイ 「いや、違う。あなたはやしろ様。」
フラン 「メイ？」
メイ 「だって、そうじゃなきゃ私は・・・。」
フラン 「メイ、メイ！落ち着いて。」
メイ 「嫌・・・嫌嫌嫌——！」

何かが割れる音。
メイは人形になる。

フラン 「おい！メイ？メイ！」

崩れ落ちるメイ

フラン 「え？お、おい、どうしたんだよ。」

クロ 「壊れてしまったんだ。」

フラン 「え？」

クロ 「ここにずっと居続けて壊れてしまった。」

フラン 「壊れたって、メイ、メイ！」

クロ 「このままだと本当に人形になってしまう。」

フラン 「人形に？」

クロ 「心が消えかけてる。」

フラン 「そんな！なんとかして助けなきゃ！クロ、どうすれば元に戻る？」

クロ 「頼みがある。メイの心動かせた君に。」

フラン 「頼み？」

クロ 「メイをここから、この遊郭から連れ出して欲しい。」

フラン 「ここから？」

クロ 「外に出れば或いは。」

フラン 「可能性はあるんだな？」

クロ 「ああ。」

フラン 「クロ。」

クロ 「ん？」

フラン 「それって俺に、足抜けしろって事だよな？」

クロ 「・・・ああ。」

暗転

鈴の音

⑬ やっぱり言葉はいらない

明転

サンタリアと、こてつが入って来る。
後ろで、エステ、ナイル、モカ、メーブルが様子を伺っている。
スーが入って来る。

エステ 「スー！」

スー 「あ、エステ？フラン知らない？」

メーブル 「シ！」

スー 「え？何々？あんた達また盗み見？何回目？」

モカ 「今度はちゃんと直にレクチャーしたから。」

スー 「ホントに？」

エステ 「ホントホント。私も見てたから。」

ナイル 「うん。」

スー 「見物ね。」

5人 「・・・。」

こてつ 「冷えますね。」

サンタリア 「ええ。」

5人 「ん？」

こてつ 「この後暖かくなるそうです。」

サンタリア 「ええ。」

エステ 「これは。」

こてつ 「それからまた冷えるそうです。」

サンタリア 「ええ。」

モカ 「まさか。」

こてつ 「その後暖かくなるそうです。」

サンタリア 「ええ。」

ナイル 「そのまさかだよ。これは。」

こてつ 「ええ。」

サンタリア 「ええ。」

5人 「逆逆う。」

こてつ 「身請け受けてくれますね？」

サンタリア 「ええ。」

5人 「んんん！？」

ずっとこける5人、苦悩する。

エステ 「今なんて言った？私その前の展開に夢中で。」

ナイル 「多分身請けするって言った。多分。」

メーブル 「(頷く)」

ナイル 「てかあんたどさくさに紛れて喋ったでしょ？」

4人 「え？」

メーブル 「!(口笛)」

ナイル 「誤魔化した！」

モカ 「ああ!わからん、複数の情報が交錯していてどれを取ればいいんだ！」

エステ 「とりあえずはサンタリア。あの二人私達には理解できぬ所で愛が育まれていたという事なのか?そうなのか？」

モカ 「わからん!どこにそんな琴線に触れるポイントがあったんだ。」

ナイル 「ああ、恋ぞ魔訶不思議なりや。」

スー 「メーブル？」

メーブルは二人の前に立つ。

メーブル 「・・・。」

こてつ 「ん?君は。」

サンタリア 「どうしたの？」

メーブルはこてつとサンタリアの手と手を繋がせる。

サンタリア 「あ。」

こてつ 「これから、よろしく。」

サンタリア 「はい。」

エステ 「よし、ビビ様に報告だ！」

モカ 「ヤリテにもね。」

メーブル 「ナイル、行こう行こう！」

ナイル 「普通にしゃべるのね。」

サンタリア、こてつ、新造の四人は出て行く。

スー 「・・・。」

フラン入って来る。

フラン 「なんだ?何かあったのか？」

スー 「サンテリア様が身請け決まったの。」
フラン 「え？」
スー 「びっくりでしょ？」
フラン 「ああ。じゃあ、ここを？」
スー 「うん、出られる。」
フラン 「そっか、こっから出てくのか。」
スー 「・・・フラン。」
フラン 「何？」
スー 「私の事避けてるでしょ？」
フラン 「避けてないよ。」
スー 「本当？」
フラン 「うん。」
スー 「・・・嘘つき。」
フラン 「嘘じゃねえよ。」
スー 「なんで意地張るのよ。」
フラン 「張ってねえ。」
スー 「私はね、フランが好きなんだ。」
フラン 「え？」
スー 「これは嘘じゃないよ。」
フラン 「・・・うん。」
スー 「うん。」
フラン 「・・・。」
スー 「あーあ、言っちゃった。」
フラン 「スー。」
スー 「ん？」
フラン 「あの、俺。」
スー 「言わなくていいよ。答えが知りたい訳じゃないから。」
フラン 「え？」
スー 「決めた事があるの。」
フラン 「決めた事？」
スー 「うん、私ね、身請けしてここを出てく。」
フラン 「え？」
スー 「一分一秒でも早く。」
フラン 「・・・。」
スー 「これ以上フランを傷つかせない為に。」
フラン 「スー。」

スー 「私ね、幸せになるから。絶対に幸せになるから。」

フラン 「うん。」

スー 「だから、だからね、今しか言えないから今言っとく。私は！フランが好き！何かボーッとしてる所も！本当は誰よりも仲間思いで自分の犠牲も厭わない所も！ふうたといえる時はいつもヘラヘラしてる所も！タバコを吸う仕草も！私を避けておきながら！大切にしてくれてる所も！全部！全部！・・・好き、好き。」

スーは出て行く。

フラン 「・・・。」

⑭ デレスタとサングリア

M 「別れ」

以下のシーンはセリフは無くサイレントで行われる。

サングリアがこてつを連れて出てくる。お祝いムードで周りには新造達やビビがいる。ヤリテに連れて来られるテキーラ、不貞腐れている。

シーシャ、ターシャがデレスタを連れてやってくる。

エステとモカが、こてつとサングリアにキスを要求している。サングリアは乗り気だがこてつは緊張しており試行錯誤している。

デレスタはビビに挨拶をする。微笑むビビ。

痺れを切らしたサングリアはこてつの顔をむんずと掴みキスをする。

興奮する一同。

キスが終わりサングリアはビビに挨拶をする。うなづくビビ。

サングリアとこてつ、出て行く。

玄関側からは、しちがやって来る。

二人の妹は嬉しそうにしちを迎える。しちはデレスタを迎える、微笑むデレスタ。

その後、妹二人を呼び寄せ抱きしめる。

戸惑う一同。

しちは、ビビを見る。ビビは頷く。

しちはデレスタを連れ下客席からはけて行く。

シーシャ、ターシャは嬉しそうに手を振っている。

スーは走り込んで、デレスタに向かい何やら叫ぶ。

一同スーを見る。
デレスタはスーの方を見る。彼女は少し微笑み、艶やかに手をふり去っていく。
スーは手を振る。皆も手を振り始める。
残された者は全員が手を振り見送る。
そんな中テキーラだけは手を振らない。
デレスタとサングリアはいなくなり手を振るのをやめる一同。
残された者の顔は様々である。

追廻の声 「足抜けだー！」

その声に驚く一同。ちりじりにはけて行く。

追廻の声 「足抜けだー！絶対に逃がすな！足抜けだー！向こう行ったぞ！追えー追えー
ー！足抜けだー！」

明かり変化

⑮ 足抜け

仕置き部屋前

そこに、追廻の男がふうたを連れて入って来る。

ふうたは縄で腕を縛られ。顔には痣がある。

男 「とっとと入れ！」

ふうた 「うう。」

ガシャンと鉄格子の音

出ていく追廻しの男。

咳き込むふうた。

フラン入って来る。

フラン 「ふうた！」

ふうた 「フラン。」

フラン 「大丈夫か？」

ふうた 「ははは、しくじっちゃったよ。」

フラン 「なんでこんな事。」

ふうた 「お前に偉そうな事言っておいてこの様だよ。本当なさげねえ。」

フラン 「何があったんだよ。」

ぷうた 「シャオチを逃がそうとしたんだ。」

フラン 「シャオチを。」

ぷうた 「ああ。」

フラン 「シャオチは？」

明かり変化

シャオチ舞台上に出てくる。

シャオチ 「ぷうた！ぷうた！」

追廻 「捕まえたぞ。」

追廻 「こっちだ！」

シャオチは簪で自らの首をかつきる。

ぷうた 「・・・自殺しちゃったよ。」

フラン 「そんな。」

ぷうた 「かげとらのせいだ。」

フラン 「かげとら？あの成金の？」

ぷうた 「あの野郎は、事に及ぶ時、何度も何度も殴っていた。そういう性癖があったんだ。シャオチはずっと悩んでいた。」

フラン 「だったらあいつをさしにすれば。」

ぷうた 「俺もそう思ってビビに掛け合ってたさ。でも駄目だった。」

フラン 「なんでだよ。女郎達は大事な商品だろ。」

ぷうた 「かげとらは、この支援者なんだ。多額の寄付をしてる。だから死なない限りは止められないだよ。そう言った。」

フラン 「そんなのおかしいだろ！」

ぷうた 「ああ、そうだな。俺もおかしいと思ったよ。だからここから出そうと思った。命を軽く扱う所に居続けるなんて耐えられなかったから。」

フラン 「お前はどうなるんだ？」

ぷうた 「・・・。」

フラン 「・・・。」

ぷうた 「どこに行く？」

フラン 「ビビに。」

ぷうた 「無駄だよ。」

フラン 「わかんねえだろ。」

ぶうた 「わかるさ。」

フラン 「わかんねえよ！」

ぶうた 「・・・ここに居る事は、つれえよな。でも俺意外と楽しんでたんだぜ？」

フラン 「なんだよそれ。こんなクソみたいな所。」

ぶうた 「そんな所でもお前とスーと一緒に居れた時間は俺にとっちゃ楽しい時間だったんだよ。だから感謝してる。ありがとうな。」

フラン 「やめろ！諦めんじゃねえ、絶対助けるから。な！」

ぶうた 「・・・フラン、お前にも大事な人いるだろ？そいつを守ってやれ。」

ヤリテ、しちが追廻の男が入って来る。

男はぶうたを立ち上がらせる。

しち 「本当に危ない所でしたよ。うちの男衆がいなければ逃げ出せていたかもしれない。せん。」

ヤリテ 「全くなんて事してくれたんだい！私はあんたを信用してたんだよ。なのにこんな馬鹿な真似して。」

フラン 「姉さん！」

ヤリテ 「フラン！ここに用も無く入ってくんじゃないよ！」

フラン 「ぶうたを。」

ぶうた 「言うな！それ以上言うんじゃない。」

フラン 「なんでだよ！」

ぶうた 「お前にはまだやる事があんだろ。」

フラン 「・・・」

ヤリテ 「ふん、良い勘してるじゃないか、二人共連れてっちまおうと思ったのにさ。すいませんね、本当に。今後こういう事は無いように躰ますので。」

しち 「当然です。」

ヤリテ 「それとこいつの処遇ですが・・・。」

しち 「ここには置いておけません。」

ヤリテ 「勿論です。後、シャオチですが。」

しち 「あれは明日の朝流しましょう。」

ヤリテ 「ああ！もう、かげとら様になんて言えばいいのか。」

ヤリテ達はぶうたを連れて出て行く。

スー入って来る。

スー 「フラン！良かった。無事だったのね。」

フラン 「無事じゃない。」
スー 「え？どうゆう事？」
フラン 「……。」
スー 「どうゆう事？」
フラン 「……。」
スー 「ぶうたは？……ねえ！ぶうたは？」
フラン 「シャオチと足抜けした。」
スー 「え、シャオチと？どうして？」
フラン 「かげとらの暴力を受けてた。ぶうたは見かねて。」
スー 「それで？シャオチは？ぶうたは？」
フラン 「……シャオチは死んだらしい、ぶうたは、しちに連れてかれた。」
スー 「しちに連れてかれた？それってどこに？」
フラン 「……。」
スー 「どこについて聞いているでしょ！答えて！」
フラン 「処分場だよ！わかるだろ。ここで生きて来たなら！」
スー 「そんな。なんで止めないのよ。」
フラン 「止めたさ。」
スー 「止めてない。」
フラン 「止めたって！」
スー 「止めてない、連れて行かれたなら止めてないって事でしょ！」
フラン 「止められなかったんだよ。ぶうたに止められて。」
スー 「そんなの当たり前じゃない。」
フラン 「じゃあ、どうすれば良かったんだよ！ぶうたを連れ出してここから逃げ出せば良かったのか？」
スー 「そうだよ！」
フラン 「……。」
スー 「大切な人が危険に晒されてたら自分を投げうってでも助けるんだよ。なんでそれが出来ないの？」
フラン 「……。」
スー 「私、フランはそれができると思ってた！」
スーは出て行く。
残されるフラン。

フラン 「……助けないと。」

フラン出て行く。
明かり変化。

⑩ かげとら

ビビ、他の女郎も出てくる。シーシャ、ターシャもいる。

ビビ 「お前達！かげとら様にシャオチの事はしゃべるんじゃないよ！わかっているとは思うけど、かげとら様は怒らせたら手が付けられないんだからね。ここはなんとか乗り切るんだよ。」

女郎 「はい。」

かげとら 「シャオチ！シャオチ！」

かげとら入って来る。

ビビ 「これはこれはかげとら様。」

かげとら 「シャオチ！私のシャオチは何故おらん？」

ビビ 「それが・・・。」

かげとら 「なんだ？」

ビビ 「今は所用で。」

かげとら 「所用？儂より大事な用があるというのか？」

ビビ 「そういう訳では。」

かげとら 「なら直ぐに連れてこい！」

ビビ 「勿論すぐに。」

かげとら 「早くしろ！会いたうてたまらんのじゃ！」

ビビ 「ではその間、他の女をご用意しますので。テキーラ、エステ、ナイル、メープル、モカ。お相手してあげなさい。」

エステ 「はい。あ、あのお相手致します。」

ナイル 「お酒は如何です？」

モカ 「お料理は？」

メープル 「・・・。」

テキーラ 「歌は如何でしょう？」

かげとら 「・・・。ならお前、歌え。」

テキーラ 「は、はい。」

テキーラ通りゃんせを歌おうとするが声が震えていて聞けるものではない。

かげとら 「声が震えておるではないか！やめろやめろ！下手くそ。聞いておれん、壊れた
楽器か貴様。」

テキーラ 「も、申し訳ありません。」

かげとら 「ふん！」

スーが入って来る。

スー 「ビビ様！」

ビビ 「スー、どうしたんだい？血相変えて。」

スー 「お願いです。ぶうたを助けて下さい。」

かげとら 「ぶうた？」

スー 「何でもしますから。」

ビビ 「スー、その話はまた後で。」

スー 「間に合わなくなるじゃないですか！」

ビビ 「スー。」

エステ 「やめなつて。」

かげとら 「話を読めぬな、何の事だ？」

スー 「お前が、お前がシャオチを追い詰めるから！」

ビビ 「スー！」

かげとら 「シャオチ？シャオチがどうかしたのか？」

ビビ 「それは。」

かげとら 「答えろ！」

ビビ 「・・・。」

かげとら 「答えぬというのなら。」

かげとらはシーシャの首を締めあげる。

シーシャ 「う！」

ターシャ 「お姉ちゃん！何するの！止めて。シーシャを虐めないで！」

かげとら 「答えろ。シャオチはどこにおる！？」

スーは近くにあった酒瓶で殴りつける。

シーシャを離す、かげとら。

かげとら 「うう！貴様この儂に、この儂に何をしたのか解かっておるのだろうか？」

スー 「死んだわ。あんたのせいで。」
かげとら 「……」

スー 「あんたの暴力に耐えかねてシャオチは死んだの！」
かげとら 「成程。合点がいった。何か変だと思っておったのじゃ。そうか死んだか。残念だよ。もっと苦しむ姿が見たかったのに。なあ！」

かげとらはスーの首を絞める。苦しむスー。

かげとら 「ビビ！先程他の女を用意すると言ったな？ならば僕はこやつ、スーを指名じゃ。これで文句はなからう。皆出て行くがよい。」

ビビ 「恐れながら、かげとら様、女郎をモノのように扱われては困ります。」
かげとら 「金は払うぞ。それで文句はなからう？」

ビビ 「そういう問題ではありません。女郎達は皆生きています。」
かげとら 「生きておるから楽しいのではないか！苦しむから美しいのではないか生き物は。」

テキーラ 「この外道！」

スー 「離し、て。」

かげとら 「わははは、いい顔するではないか、そそる、そそるぞ！」

後ろからメーブルが酒瓶を拾いまた叩きつける。

かげとら 「ぐう。」

よろめくかげとら。エステ、モカ、ナイル、テキーラはスーを救い出す。
むせるスー

エステ 「大丈夫？」

スー 「うん。ありがと。」

モカ 「ここにいちや駄目。」

スー 「え？」

かげとら 「スー！私のスー！」

ナイル 「逃げて！」

かげとら 「逃がさんぞ。」

かげとら、スー捕まえようとするがビビがそれを止めようとする。
が、突き飛ばされる。

ビビ 「ああ！」

シーシャ 「ビビ様。」

ターシャ 「ビビ様。」

ビビ 「スー！逃げなさい！」

テキーラ 「行きな！」

スーは逃げ出す。

なんとか押さえつけようとする女郎達。

それを振り払いスーを追いかけるかげとら。

明かり変化

⑰ 足抜け

M 「足抜け。」

壁明かり、舞台面にいた女郎達はストップモーションになり影絵のシルエットのようになる。

以降シルエットのみが見える

シーンとなる。

追廻の男達の声がする。

追廻 「足抜けだ！むこう行ったぞ！追えー！追えー。」

フランが舞台面に飛びこんでくる。

何人か追手がフランを阻む。フランはするりとかわし。逃げて行く。

追廻 「そっちに行ったぞ！逃がすな！絶対に捕まえるんだ！」

追廻の男達は各々に叫びながらフランを追う。

スーが出てきて逃げて行く。

かげとらスーの後を追う。

かげとら 「待て、スー！逃がしはしないぞ！」

追廻に追われるフラン出てくる。

かげとらに追われるスーももう一度でてくる。

二人は一瞬交差する。

女郎のシルエットは動き出す。

真ん中からクロが入ってくる。

ビビも入ってくる。

ビビ 「クロ！」

クロ 「どうした？」

ビビ 「かげとらが、暴れ出して。」

クロとビビは出て行く。

奥座敷、人形部屋、からくり人形が舞っている。

その中にメイが象徴的に立っている。

スー入ってくる。スーはメイに気付く。

スー 「あなた。」

かげとらの声が聞こえる。

スーは自分の服を脱ぎ、メイの服を脱がせる。そしてメイの服を着てお面を被る。

二人は入れ替わる。

かげとら入ってくる

かげとら 「スー、スー。見いつーけーたあ。」

かげとらはスーの服を着たメイの首を絞めあげる。

かげとら 「スー、スー！」

メイはスーに手を伸ばす。

動かなくなるメイ。

満足そうなかげとら。

ゼンマイの音

人形達が動き出しかげとらに襲い掛かる。

かげとら 「あ？なんだ！？お前ら、おい何をする！止めろ！ウグ、うわあああ！！！」

かげとらは人形に引きちぎられ倒れ込む。

人形達もばらばらと散らばり動かなくなる。

フラン入って来る。メイの服を着たスーを見つめ。

フラン「これは・・・あ！良かった・・・話があるんだ、今の君には届かないかも知れな

い。でも聞いて欲しい。君を助けたいんだ。もうこれ以上君の苦しむ姿なんて見
たくないんだ。だから、ここから出よう。俺の手を、俺の手を取ってくれないか？」

スー「・・・。」

フラン「お願いだ、お願いだよ。君が、君が必要なんだ。」

スー「フラン。」

フラン「え？」

スー「フラン、ここから私を連れ出して。」

フラン「・・・ああ、行こう。」

フランとスーは手を取り合う。

眩しい明かりに包まれる。

暗転

⑱ エピローグ

明転

クロは動かなくなったメイを抱きしめている。

ビビ入ってくる。

ビビ「・・・クロ。それは。」

クロ「・・・守ってやれなかった。」

ビビ「・・・。」

クロ「この子を。」

ビビ「・・・。」

クロ「救えなかった。」

ビビ「そうだね。」

クロ「・・・。」

ビビ「でもね、救った命も沢山あったろ？」

クロ「・・・。」

ビビ「元々皆処分されるはずだった。それをお前達が留める場所を作った。一抹の機会
を、ここから飼われて出て行く為の場所をね。沢山の命を救ったんだ。」

クロ 「・・・許してくれ。メイ。シロ。」

クロはメイは抱きしめる。

格子の後ろから女郎達が鳴きながら現れる。

しち、やってくる。

しち 「ビビ！屋敷中大騒ぎだぞ。ってこりゃあ・・・。」

ビビ 「ああ。」

しち 「こんな事になっちまうとはな。」

しちは猫耳を外し頭をかく。

ビビ 「しち、頭。」

しち 「おっと失敬（被りなおす。）とりあえず、また連れて来たんだがどうする？」

ビビ 「決まってるだろ。始めるよ。」

しち 「一匹でも助かるといいな。」

ビビ 「そうだね。クロ。」

クロ 「・・・。」

ビビとしちは猫達を見る。猫達の鳴き声は続いている。

暗転

鈴の音

それと共に猫の鳴き声は消える。

終わり

（おことわり）当台本の上演・使用については、著作権上、その作者である「さいけ」に対して著作権使用料を支払って使用して頂くこととなります。

この許可を得ずに台本を無断使用して公演を行うと違法行為になりますのでご注意ください。

台本を使用する場合は必ず「ポポポ」まで連絡をし、手続きを取って頂きますようお願い

致します。連絡先は劇団ホームページ(<http://popopo-gekidan.com/>)よりご連絡下さい。